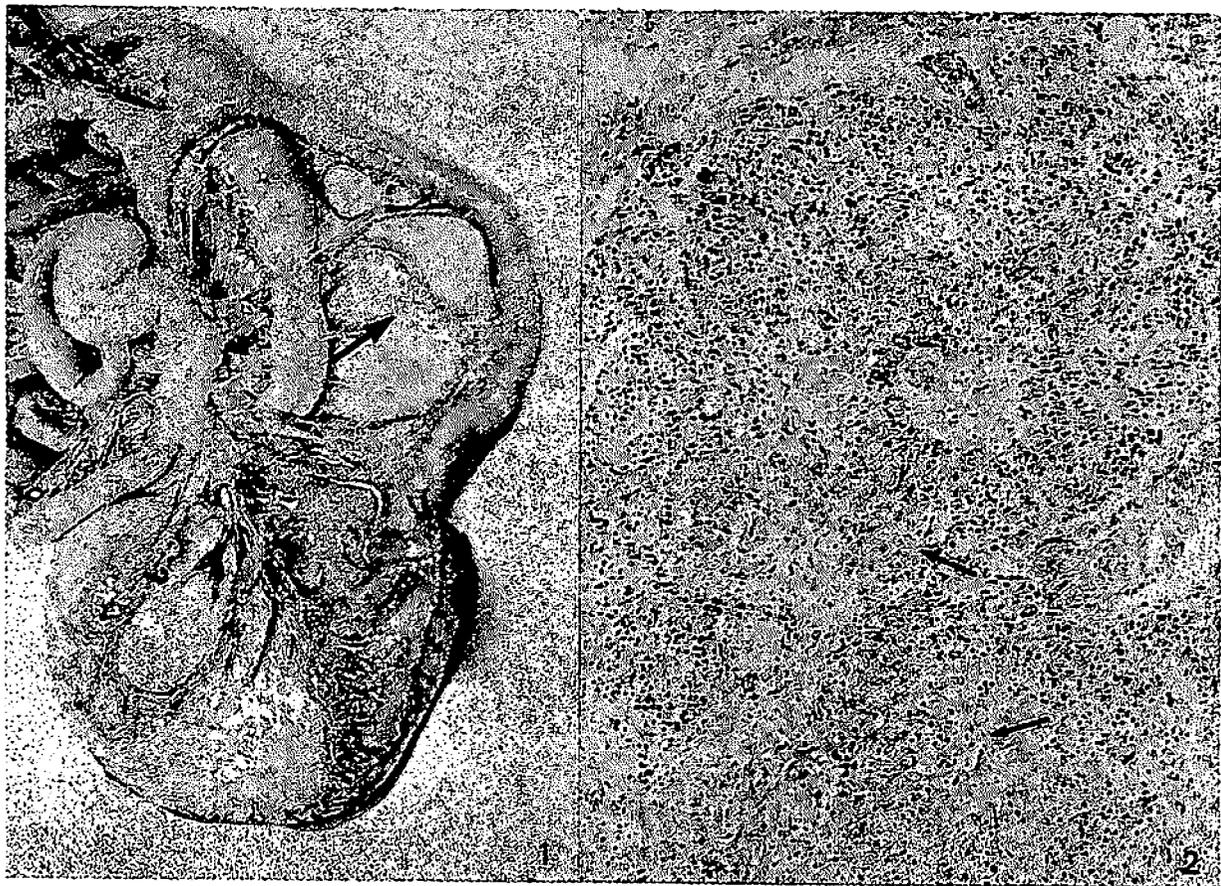


犬の膵萎縮

岩手大学農学部家畜病理学教室出題 第15回獣医病理学研修会標本 No.205



雄、5才、体重約10kgの雑種犬で、1970年12月初めから食慾は変わらないが下痢が目立ち、削瘦し、犬座姿勢を好むようになったので獣医師の診を乞うた。T. 35℃、P. 160、貧血、栄養状態悪く、特異の臭気を持つ下痢を認めた。栄養剤、抗生物質などで処置したが、1月18日にへい死した。剖検により、最大巾約1cm、長さ約12cmで十二指腸間膜上に内接する弧を描く、発達の悪い膵が認められた。表面は顆粒状の分葉像を示した(図1、矢印)。その他、犬糸状虫の寄生が認められた。

組織学的には、膵管、膵に分布する神経、血管などの間質組織に著変なく、小葉は何れも小さく小葉間結合織により境されていた。一部の間質に軽度のリンパ球浸潤や、ヘモジエリン顆粒の小集合がみられた。一方、実質では著しい外分泌系腺細胞の欠落がみられ、大部分は内分泌系島細胞の不規則な集合として認められた。これらの中にLounoy染色でかるうじてその存在を認める程度の子モゲン顆粒を含んだ貧弱な外分泌系腺細胞の管状配列が認められたにすぎない(図2、H-E染色弱拡大の矢印附近)。これに対し組織の大部分を占める島細胞には特別な変化は認められない。

このような膵組織の萎小化については、外分泌系腺細胞が主として関与することはよく知られており、病理発生的には低形成と萎縮が考えられている。前者は膵管に変化のみられないのが常で、臨床的に発症と治癒を繰り返しながら、生後1年位で致死的となり、後者の場合は膵管の栓塞とか炎症を伴うのが常であるといわれている(Jubb & Kennedy)。本例は年齢が5才であること、生前の経過が約1.5ヵ月である点などから、膵管に変化がないとはいえ、これを低形成として片付けるわけにはいかない。また、膵萎縮の多くが炎症に基づくものであることは認めるとしても、本例にみられた程度の細胞反応が、萎縮を説明する炎症像と考えることもいさか困難なようである。従って、膵萎縮の病理発生については炎症に随伴しないものも存在し得ることを否定し去るわけにはいかない。

このほか、全身臓器組織の血管内に多数のマイクロフィラリヤが切片上に認められたが、膵組織内の血管には認められなかった。従って形態的には全身の強い循環障害などの関連も考えにいれる必要がある。